

新産業廃棄物最終処分場基本計画策定委員会中間報告会実施結果について

1 中間報告会の概要

実施日時：令和3年12月4日（土） 14時～16時15分

会議構成：事務局報告（1時間）、正副委員長報告（15分）、質疑（1時間）

実施場所：日立市民会館（日立市若葉町1丁目5-8）

参加人数：65名

2 開催結果

(1) 事務局報告

第1回、第2回策定委員会検討事項及び各委員からの評価について、中間報告会資料により事務局から説明した。

(2) 委員長・副委員長報告

大迫委員長、小峯副委員長から、専門的な見地から、総括的な報告をいただいた。

[大迫委員長]

- ・ 新処分場は地域の社会経済を支える基盤である。持続可能な社会を実現するための理念に応え、エコフロンティアかさまを踏襲しながらも更なる安全性を確保した処分場の基本計画を検討している。遮水工は全国トップレベルであり技術の粋をとらえている。多重な対策とし、幾重にも遮水工を重ねて安全を担保している。
- ・ 浸出水処理施設も、日立市の降雨実績を過去30年まで遡って検証し、エコフロンティアかさまの3倍の全国でも大きな調整槽容量としており、かなり余裕がある。

[小峯副委員長]

- ・ 整備計画地の地盤は石灰岩が主であり、既往調査結果では、空隙はあるが物理探査の結果から判断するに連続性は小さいと思われる。もし、有意な空洞がある場合には、空洞を充填したり地盤改良をしっかりと行うなどの対策を実施者に求めていく。
- ・ 盛土勾配の1：2という実績に基づく形状であり、また、力学的に安定性を確保できる材料を選んで、有効な締固めをして、寸法や材料の設計をしっかりとやっていくように、実施者に求めていく。
- ・ 遮水工は、廃掃法の規定以上の仕様を選んでいる。土質系遮水材であるベントナイト混合土は均質に混合することに注意が必要であるが、ベントナイト砕石は、それに比べて施工の面で有利な材料である。遮水性能においても高い要求性を追求しており処分場性能としては高い性能を設定している。
- ・ 2つの区画で埋立をし、浸出水量を減らす方法も導入していくなど、運営面でも高い性能を追求していくことを求めていきたい。

(3) 市民からの主な意見と回答（○：質問、→：事務局回答）

基本計画検討状況に係る意見としては、過酷事故などの維持管理できない時の対応を検討して欲しいという要望などがあった。ほか、市民からは基本計画以外の質問や意見も多く出された。

○ 公共では中間処理施設を造らないということだが、民間が中間処理施設を日立市に造ることを排除できないのか。

→ 県として中間処理施設を整備する方針はないが、民間の事業者が適切な手続きを経て整備しようとするものを妨げることはできない。

○ 県内1箇所オープン型処分場を造るのではなく、SDGsに基づいて、小規模の被覆型処分場を沢山造れば良いと思う。ごみも地産地消の時代である。

→ 本計画の規模の処分場を整備するには、オープン型が適切だと判断した。ごみの地産地消というご意見があることは承知している。

○ カルシウム等により配管が詰まってしまったら、浸出水があふれて鮎川へ流れ込むのではないか。整備地は石灰岩質の地盤なので、カルシウム質というのは環境中に多く存在すると調査結果も出ている。カルシウムがますますつまりやすくなる環境だと思う。

→ 詰まらないような管径を設計で検討していく。カルシウムの考え方として、溶出したものがすべて配管に付着して閉塞させるというものではない。また、管径の3分の1程度の流量となる設計としていくので、詰まる心配はないと考えている。さらに、浸出水集排水管は、葉脈状に敷設することで、1本が詰まっても流せるようになっている。

○ 安全・安心な施設作りが前提だが、今回こういった施設ができることにより、日立市の経済の成長・発展を考えていただきながら、地域振興策を最初だけではなく、継続して実施していただけるのであれば、日立市にとってもプラスになる施設になりえるのでお願いしたい。そうすることで、プラスになると思う。そうなるのであれば賛成したい。

→ 地域振興については、今年の春に実施しているフォローアップ説明会で、それまでの住民説明会で要望のあったものについて、いくつか想定としてお示しした。日立市から受託の表明を頂いたので、どういった形で地域振興を進めていくのかは、具体策を日立市とよく相談しながら、地元の方々に伺いながら、できる範囲でしっかりとやらせていただきたい。この処分場ができることにより、日立市の経済の活力につながっていくように我々としてもしっかりやらせていただきたい。

- あのあたりは石灰の山にある唐津沢という沢で、水が下に抜けている。今は石灰岩を採掘した跡地が大きな湖になっているが、出口の川がない。石灰だから水が下にしみる。遮水シートを敷くと言っているが、エコフロンティアかさまの環境保全委員会の資料を見ると、いくつかの疑問がある。モニタリング井戸の電気伝導率は10くらいで、遮水工の下地下水の電気伝導率が60程度になっている。大腸菌もダイオキシンも出ている。なぜ大腸菌がでるのか。ダイオキシンも県の環境白書にある平均の1.5倍の濃度が出ている。
 - エコフロンティアかさま環境保全委員会の資料について、ダイオキシンは農薬由来であるという説明をこれまでもしてきている。また、浸出水の電気伝導度は2000程度あり、もし浸出水が漏洩して1%濃度が上がると、地下水の電気伝導率は200程度まで上昇することになるという説明も同様にしている。

- 整備の基本理念において、強靱な施設と掲げているが、30年以内に80%の確率で起こるとされている巨大地震に対して、どのような設計とするのか。また、日立市は東海村にある原発で過酷事故が起きた際に、処分場の職員が長期間避難しなければならない場合、処分場の安全性をどのように確保するのか。その対応を基本計画で検討して欲しい。
 - 様々な災害を想定して危機管理マニュアルを整備し、対応していく。過酷事故の際の処分場の対応については、まだ具体的な検討を進めていないが、電源喪失については、説明したとおり、長期間の場合には一時的にシートをかぶせて浸出水を減らすなどの対応をすることになると考えている。今後、具体的な対応について検討をしていきたい。

- 地元の諏訪町では、道路が狭い、小学校があるなど、道路事情を心配する声が多かったので、新設道路が造られるということになったのだと思う。新設道路整備について、山側道路からどう入っていくのか、既存林道にどうつながるのかイメージが出てこない。詳しいルートを示して欲しい。
 - また、工事車両の交通安全対策として通勤通学時間を避けるとあるが、工事期間や工事車両の台数がわからない。仮設でもいいので道路を造って、そこを工事車両が通るようにできないか。工事で発生した土砂や樹木は一時的に保管し、新設道路が完成してから運ぶことで、県道37号の交通量を増やさないでほしい。
 - 新設道路については、今年の8月から測量、予備設計に着手しており、地元の久保学区コミュニティには相談し、お知らせしながら進めている。予備設計により詳細なルートが見えてくるので、その段階でお知らせする。
 - 工事車両については、令和7年度中にエコフロンティアかさまが埋立終了する見込みであり、間隔を空けずに新処分場を稼働させるためには、新設道路ができてか

ら処分場工事に着手するというのは厳しい。工事車両は極力通勤通学時間を避け、安全運転の徹底などをしながら、発生土砂等を工事の中で融通させることで車両台数をなるべく減らしたい。

- 谷間にごみ捨て場を造るのは常識ではない。前回の選定委員会は最も不適切な所を選定したんじゃないかと質問している。搬入道路を新設することで、候補地選定は最低の評価になる。日立市の過去降水量を30年まで遡って浸出水処理施設を計画したとあるが、水防法は1000年間で考えており、降水量は690mm/日の基準があるので、これに合った対処をしてもらわないと納得できない。
- 最終的に日立市を選定したのは県である。あり方検討委員会では、客観的な資料に基づいて、3候補地まで絞り込み、その後、県の責任において日立市を選定している。水防法の1000年に1度の690mm/日の雨の基準については承知していない。

- エコフロンティアかさまが埋立終了してしまうとごみの捨て場所がないので、新処分場を早く造って欲しい。日立にできないと福島県や宮城県など遠くへ運ぶことになり、大変困る。日立市の整備が遅れ、エコフロンティアかさまも埋立終了してしまうと、経済活動が止まってしまうのではないかと心配している。また、市の一般廃棄物を受入れる計画があるのか。
- これから色々と調整していくことになると思うが、要望もあるので前向きに検討し、市とも調整していきたい。